

和歌山県内に残る宝永・安政地震津波関係史料の所在確認と活用

前田正明*(和歌山県立博物館)・阪本尚生*(印南中学校)

§1. はじめに

2014年度から、和歌山県立博物館を中心に、和歌山県教育庁文化遺産課、和歌山県立文書館が連携して、地域に眠る「災害の記憶」と文化遺産の発掘・共有・継承する事業(国庫補助事業、以下「災害の記憶」調査と略す)をおこなっている。「災害の記憶」調査において、その中心の1つとなっているのが「地震津波関係史料」の所在確認である。

本報告では、宝永地震津波、安政東南海・南海地震津波に限定し、「災害の記憶」調査によって明らかになった史料を紹介する。そのうえで、印南町立印南中学校でおこなわれている、「災害の記憶」調査の成果を活用し、地域住民自らの防災・減災活動につなげていくための啓発活動を紹介する。

§2. 今改めて所在確認を行う意義

これまで地震研究者らが中心となり、地震津波関係史料が網羅的に収集され、史料集(『大日本地震史料』全2冊、1904年、『増訂大日本地震史料』全3巻、1941・1943年、『日本地震史料』1951年、『新収日本地震史料』全21冊、1981～1994年、『日本の歴史地震史料』拾遺』全8冊、1998～2012年、『紀伊半島地震津波史料-三重県・和歌山県・奈良県の地震津波史料-』1981年など)が刊行されている。このことで、災害史研究が進展した。一方、史料集に収録された史料のなかには、編さん史料や自治体史誌に掲載された活字化された史料からの引用が少なくない。今後の研究において史料批判を可能にするためには、改めて原本の所在を確認し、少なくとも画像データとして保存し、共有することが必要である。

「災害の記憶」調査では、こうした点も念頭に置きながら、和歌山県内に残されている地震津波関係史料の所在確認(原本確認)をおこなっている。歴史史料全般にいえることであるが、現在進行している社会構造の変化によって、歴史史料は加速度的に消滅している。史料集に掲載されている史料も同様の状況にあり、仮に現時点で史料が確認できても、今後散逸してしまう可能性がないとはいえない。こうした現状から、収集した史料の画像データは、連携している関係機関と共有することになっている。

§3. 地域に残る史料からみえてくること

「災害の記憶」調査によって確認できた史料としては、次のようなものがある。

①後世に教訓として伝えるため、被災状況だけでなく、犠牲者供養、自らの被災体験や伝聞情報に基

づく警告、それらを伝える取組などが記されたもの。

②被害状況を把握し、施策を実施するために、藩権力などが村役人に命じて調査させたもの。

ここでは、①に分類した史料を中心に、和歌山県内の印南町・湯浅町・広川町で確認した史料を紹介する。そのうえで、これらの史料が、「災害の記憶」(災害教訓)を後世に伝えるという観点からどのような役割を果たしているのか、地域の人々は、日々の生活のなかで、どのような形で薄らいでいく「災害の記憶」を、再び蘇らせようとしているのか、といった点について検討を加える。

§4. 地域に残る史料を活用した啓発活動

印南中学校では、2005年度から3年生の選択理科で前年に起こったスマトラ沖地震に触発されて「印南湾における津波の挙動」というテーマの自由研究に取り組み始めた。本校区の印南は津波常襲地帯で、過去の南海地震でも大きな人的被害を受けてきていて対岸の火事ではないと、3年生有志で印南湾の津波の挙動を解明し始めた。最初は60cm四方の印南湾の立体模型を作ることから始め、途中から和歌山高専の小池准教授(当時)の協力を得て津波シミュレーションの知見を加えて6年間研究した。

ほぼ結論らしきものに達した2011年に東日本大震災が発生した。これを契機に国内では防災教育への関心が高まり、本校も従来の研究成果を防災へ活かす試みを3年生総合的な学習ではじめた。印南は過去の災害記録が多く残され、ほとんどが翻刻され印南町史に記載されていたものの、地域で共有され防災に活かされる情報とはなっていなかった。そこでそれを地域住民によりわかりやすく届ける方法として「紙芝居」を作ることにしたが、翻刻されてはいるものの、過去の災害記録を読むのは中学生には難しいことであった。ちょうどそのころ、「災害の記憶」調査が印南町で行われていたことから、翻刻を原本で再確認する機会を得ると共に現代語訳化にアドバイスを受けた。その結果、啓発リーフレットや地域の災害記録を網羅した冊子「印南の災害記録」を製作することができた。現在も3年生総合的な学習でそうした史料をもとにした啓発用紙芝居を作っている。紙芝居は小学校や地域で開催される防災講演会で上演している。

§5. 文献

和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会編『先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝えるI～V』2015～2019年